

(3月15日)

戦後における家族農業経営の変化と経営単純化(旧西ドイツ)

(宇都宮大学) 津 谷 好 人

今日、西ドイツを含むヨーロッパでは、環境にやさしい農業への転換の必要が言われるが、そうなった背景には、70年代における家族農業経営の大幅な変化がある。

西ドイツでは、70年代の高度成長期に労働力が都市に吸収されたため、農産物および農業経営手段の価格に比して農業労賃が大幅に上昇した。このため、50ヘクタール規模の経営ですら農業労働者を雇用出来なくなり、夫婦二人による家族経営へと転換せざるを得なくなった。言ってみれば、家族経営としては50ヘクタール以上の規模が必要であり、それ未満はワンマンファーム化することになったのである。参考までに農家戸数の推移を見ると、60年代末頃からは20ヘクタール以下層が、70年代初めには30ヘクタール以下層が、そして後半以降は50ヘクタール以下層が減少に転じ、それ以後は50ヘクタール以上層のみが増加している。

ところで、この間の農業労働力の不足、そして規模拡大は、急速な機械化(トラクター台数で見ると1976年がピーク)をもたらしたのであるが、このことは同時に、機械化に向く作目の増加を、すなわち、穀作、とうもろこし、菜種などの、いわば穀物連作型の作付けの増大と経営の単純化をもたらした。そしてここで留意すべきは、これを支えたのが連作に対応出来る農薬、化学肥料の技術であり、その大量投入であったことである。

規模拡大した経営で優秀な成績を挙げているものは、こうした意味での管理集約度が高くなり高いことが特徴である。収益性の高い農業は、今日でも依然としてこうした技術が支

えるともいえる。その反面、こうした経営が困難な中山間地帯の農家、あるいは小規模農家は脱落する。その意味で70年代以降、環境にやさしくない農業、環境に逆行する農業が展開されてきたと言って過言ではない。

こうした西ドイツ農業の構造変化を見る場合にもう一つ注目すべきは、マシーネンリングの動向である。報告では、小農が多く、条件不利地域対策の先進地であるバーデンビュルテンブルク州を例にみることにしたい。

西ドイツのマシーネンリングは、通常次の4つのサービスを提供している。(1)農作業の受委託、(2)経営ヘルパー、(3)大工等の家事手伝い、(4)景観保全(道路の清掃、普請などのいわばむら仕事に属するもの)、である。

まず、マシーネンリングが供給するサービス額は、80年代以降急速に増加(利用面積も)しているが、その中心は作業受委託であり、家族経営の機械作業を補完して維持存続に大きな役割を果たしていることが窺われる。

次に、経営ヘルパーであるが、これは農業者の健康保険制度の改正を機に取組んだものであり、80年代後半に急速にその取扱額が大幅に増加した。経営ヘルパーはこの間に專業化が進み、近年では全体の半ばを占め、また年齢をみても25歳未満が減少する一方、何らかの教育を受けたものの比率が高まっている。この点は、従来のようにヘルパーを経て一人前の農家になるというコースは縮小の方向にあることと裏腹である。

他方、これらに比べると、家事手伝いと景観保全は取扱額は小さい。しかし、このうち景観保全の仕事は90年代に入ってから急速に増加の方向にある。これは、本来、役場のような公的な機関が担うべきものと思われるが、今後、マシーネンリングが農村地域の維持保全、さらに地域の雇用の確保に大きな役割を果たそうとしていることが窺われて興味深い。

(文責・両角和夫)